

30 年程前の宿泊療育キャンプ

ある障害児・者の親の会主催の夏の療育キャンプ（一泊二日）に、参加した。在宅児、施設利用児、その家族、ボランティア、スタッフ等で総計 70 名近くの参加であった。あいにく二日間とも雨で高原の散策等は出来なかったが、ホテルの温泉プールで遊んだり、音楽遊び等で楽しんでいた。

私は親への講話ということで声がかり参加したが、僕の野暮な話を聞くより、親子が楽しく、ゆっくり温泉につかれればいい思い、早々に切り上げた。

ふと思い起こせば、30 年ほど前にこうした療育キャンプを企画・運営スタッフとして参加したことがある。写真（当HPスナップP：15/8/18）は、昭和 45 年、ものである。

この写真を今回持っていった。殆どの家族がこの写真を見て、「この時代、まだ結婚もしていなかった」、また「この子も幼く、姉妹の子育てもあり、こうした行事に参加できる状態でなかった」等々のコメントも聞かれ、時の長さを感じさせられた。しかし、写っている一家族が、今回のキャンプにも参加していたのには、感慨深いものがあった。

これらの記念集合写真を見ると、知事、療育センター長、国立療養所長、児童館長、教育委員会、民生担当者、各親の会の関係者、等々、その後の県、市の福祉を推進してきた方々が、殆ど写っている。まさに、あの当時の障害児の関係者が殆ど参加していたということだろう。

今のように、障害児関係団体、関係機関も細分化していなかったし、行政、専門機関とて、障害児問題の対応への模索の時代だったことが推測され、それ故に、写真のような企画が行われたのであろう。僕は就職間もない頃だけに、そうした時代の動きを読みとる程には見識も持ち得ていなかったもので、そう推測するしかないのだが……。

古き良き時代の話と云ってしまえばそれまでだが、あまりにも多くの障害児の親の団体、グループが派生し、また、どこのどの部署が何をどう担当しているのかを掴みかねる関係機関等々の現状からは、恐らく写真のような企画は今では不可能であろう。

それだけに、古き良き時代の話と片づけずに、現状を認識した上で、こうした障害児の問題の共有認識の方策・連携を、どう構築するかが、今後の大事な課題でないかと気づかされた今回の参加・体験であった。

（2003 年 08 月 18 日記）